スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI 01

ニッタイダイ　2000年　秋　創刊号

CONTENTS

創刊の挨拶●学長／広報委員長――1
SPECIAL●シドニー五輪特集――3
特集■SYDNEY 2000
シドニーにNITTAI旋風は起きたか！
［メダリストを語る］田村・田島・永田・高山
出場者メッセージ&記録／オリンピック観戦記
INTERVIEW●アスリートたち――11
Active People●OB・OG紹介――13
NEWS●上半期ニュース／News Eye／クラブ情報――15
MY VOICE●みんなの広場――18
INFORMATION●dot. NITTAI――19

創刊のご挨拶

◎

21世紀型の開かれた大学として、スポーツ文化の新しい価値を発信します。

21世紀を目前にひかえ、政治・経済・社会のあらゆる分野で変革の波が押し寄せています。教育の分野も例外ではなく、国においては、「心の教育の充実」「個性を伸ばし多様な選択ができる学校制度の実現」「現場の自主性を尊重した学校づくりの促進」「大学革命と研究振興の推進」の四つの視点から教育改革を推し進めるなど、今までの教育のあり方が根本から見直されようとしています。

本学においても、こうした社会の変化に対応すべく、21世紀に向けての将来構想である「Fu21（21世紀創造型大学）ビジョン」のもとに、開かれた大学としてスポーツ文化の新しい価値を創造すべく、本学の特性を生かして多方面にわたる改革が現在進行しています。

この度、創刊される『NITTAIDAI（ニッタイダイ）』は、そうした一連の改革から生み出されたもので、学生及び教職員相互のコミュニケーションの活性化を図るとともに、スポーツ文化の発信を通して社会に対しても積極的にコミュニケーション活動を行っていこうとするものです。ともすればこれまで、本学も含め「日本の大学は、学内の諸活動を学外に発信する努力を怠ってきた」と、その消極的な姿勢がしばしば批判されてきましたが、これからの大学は社会の理解が得られなければ存立できません。本学は、開かれた大学として社会との良い関係を築き上げるためにもコミュニケーション活動を積極的に行い、家庭や地域社会、企業などの幅広い関係者のご理解を得ながら、改革を進めてまいりたいと思います。

『NITTAIDAI（ニッタイダイ）』は、そうした改革を通して進化し続ける本学の今の姿を伝えるとともに、国際化を視野に、個人と社会を豊かにするスポーツ文化の新しい価値創造を発信してまいります。

学長　**塔尾 武夫**

創刊のご挨拶

◎

＜新しい出会いの場＞の創造とコミュニケーションの活性化を図るために。

迎える新世紀を間近にして、日本体育大学・日本体育大学女子短期大学は開かれた大学として新たな一歩を踏み出すために、このたび広報委員会を発足させ、全広報媒体の基幹的役割を担うコミュケーションツールとして『NITTAIDAI（ニッタイダイ）』を創刊しました。

本学では、6000名を超える学生が東京・世田谷キャンパス、横浜・健志台キャンパスの両キャンパスに分かれ、勉学に励み更に学友会活動、寮・合宿所生活などにより多様なキャンパスライフを送っています。

この『NITTAIDAI（ニッタイダイ）』は、そうした学生たちと教職員、あるいは学生同士が学内の情報の共有化を図るとともに、相互の理解を促進し、学内コミュニケーションの活性化を図ることを目的に発行されるものです。

また、これまで本学は積極的に社会に対しコミュニケーション活動を行ってこれませんでした。社会との良い関係を築き上げずして大学の未来はありません。次世代を担う体育・スポーツの専門大学として、教育・研究・学生生活の情報を学生の保護者や同窓生に伝えるだけでなく、社会的な理解と信頼を得るために、本学のグッドウイルやスポーツ文化の価値を積極的に発信していくことも本誌の目的です。

誌面は、学内外での研究成果の発表や今日的課題を伝える報道・情報欄、トップアスリートの活躍や新しいタイプのOB・OGの紹介及び本学への声などを紹介する固定欄、そして日体大やスポーツ文化のエポックメーキングな出来事を取り上げる特集企画欄の、大きく3つから構成されており、年2回の発行を予定しています。

なお、創刊号では特集企画「シドニーオリンピック2000」を中心とした誌面構成といたしましたが、今後は、学事関係を更に充実させた誌面構成で展開したいと考えております。

『NITTAIDAI（ニッタイダイ）』は、今日から、スポーツを愛する学内外の人々との＜新しい出会いの場＞を創造し、スポーツ文化の風を発信してまいります。

広報委員長　**西田 豊明**

20世紀最後のオリンピック

SYDNEY 2000
“シドニーにNITTAI旋風は起きたか！”

1896年、第1回オリンピック大会が開催された。
それから100有余年、2度の世界大戦、東西冷戦、民族問題など幾度か歴史の波に翻弄されながら、
20世紀最後の大会が幕を閉じた。
そして、日本体育大学も歴史の波の中にいた。2度にわたる戦争は、アスリートから人格とプライドを奪い、
スポーツを通して闘うことの意味と意義を忘れさせた。そして、1980年のモスクワ大会ボイコット。レスリング、
高田裕司選手の「涙」は今でも我われの脳裏から離れることはない。後日、一つだけ心残りがあるとして高田選手が語った。
「何もいえなかった360名の候補選手全員に本当の気持を聞いて欲しかった」と。
シドニー・オリンピック。日本は、24競技に総勢438名からなる選手団を派遣し、大きな成果を収めた。
日本体育大学は、金メダル1個、銀メダル3個、入賞者3名。通算で金メダル26個、銀メダル27個、銅メダル34個、
入賞者総数172名。これは、1928年に開催された第9回アムステルダム大会において、棒高跳びで6位入賞を果たした
中沢米太郎から連綿と築き、オリンピックとともに歩んできた日本体育大学の証でもある。
しかし、そろそろ数を誇示することはやめにしたい。大事なことは、オリンピックを通して日本体育大学が社会に
果たしてきた役割であり、田村選手、田島選手、高山選手、永田選手…が築いた21世紀への掛け橋の向こう側に、
くっきりとした輪郭に彩られた「日本体育大学」を創っていくこと。

特集「メダリストを語る」
メダリストを語ることは、日本体育大学を語ることなのだから…。

◎特集ページ・オリンピック関係使用の写真は、毎日新聞社からの提供です。

アトランタ五輪の決勝で北朝鮮のケー・スンヒに敗れてから4年。「最高で金メダル、最低でも金メダル」と言ってシドニーに乗り込んだ田村は、9月16日、決勝戦で柔道会場・ダーリングハーバーの青畳の上に立った。
対戦相手はロシアのブロレトワ。開始わずか36秒で内股で投げられたブロレトワの体は、天井を向いていた。
その瞬間、田村は青畳の上で何度も、何度も飛び跳ね、ホホには大粒の涙が流れ始める。
それは「8年越しの恋人に出会えた」歓喜の涙だった。

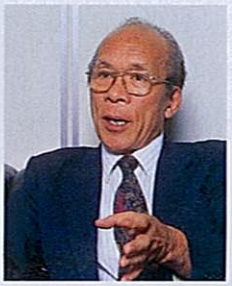
PROFILE

たむら りょうこ
1975年福岡県生まれ。
福岡工大附属高校、帝京大学を経て、98年トヨタ自動車に入社と同時に日本体育大学大学院に入学、学業との両立をはかる。
博士後期課程在学中。
7歳から柔道を始め、中学3年の90年、初出場の福岡国際大会で初優勝。以後、女子48キロ級の第一人者に。92年バルセロナ、96年アトランタと過去二度の五輪は銀メダルに終わるが、三度目のシドニーで念願の金メダルを獲得。世界選手権は93年から現在まで4連覇、福岡国際女子柔道選手権は10連勝中と、前人未踏の記録を更新中。右組、四段。

［柔道・女子48キロ級金メダリスト］

田村亮子を語る

山本 洋祐 講師
■日本体育大学柔道部監督
■シドニー五輪柔道女子コーチ



堀居 昭 教授
■日本体育大学大学院トレーニング科学系教授
■医学博士

「負けない柔道」こそ、田村柔道のすごみ。

決勝で一本勝ちした直後、コーチボックスで声をかけたのですが、「良かった、良かった！」というだけで、言葉になりませんでした。もちろん、彼女自身がいちばん嬉しかったでしょうが、僕も肩の荷が降りたということで嬉しかったですね。

田村の指導を始めたのは彼女が日体大の大学院に進学してきた時からです。寝技など彼女の足りない部分を補う形での指導と体力的な部分をサポートしてきました。既に完成された一流の選手ですから、稽古量を落とさないよう継続した稽古を続けることに腐心しました。稽古量を落とせば、それだけ技術、体力が落ちますから。それさえ、クリアできれば負けないと思っていました。また、いい精神状態で試合が出来るようにと心がけていました。

私が指導を始めた頃から、田村の柔道には変化がみられるようになりました。それは、かつてのような「秒殺しのような速さと鋭さをもった柔道」ではなく、どちらが勝ってもおかしくない旗判定の試合が増えてきたことです。それは、裏を返せば、試合の駆け引きが巧くなってきたとも言えます。実際、今回のシドニーでも薄氷の勝利が多かったが、それでも負けない。そこに田村の強さがあります。それがアトランタの決勝で敗れて以降、シドニーの決勝で勝つまで53連勝も続けることができた理由だと思います。

まさに田村の強さのポイントは、集中力と試合の組み立ての巧さにあります。そして、「どんな形でも勝つんだ！」という勝負に対する強い執念と総合的な力があるということではないでしょうか。その中でも、こそぐという勝負どころでの集中力は立派で、勝負師のすごみすらあります。一言で現在の「田村柔道」を表現すると、それは「負けない柔道」と言えるでしょう。

（10月1日世田谷キャンパスにて取材）

金メダルは心・技・体に「知」を加えた成果の証。

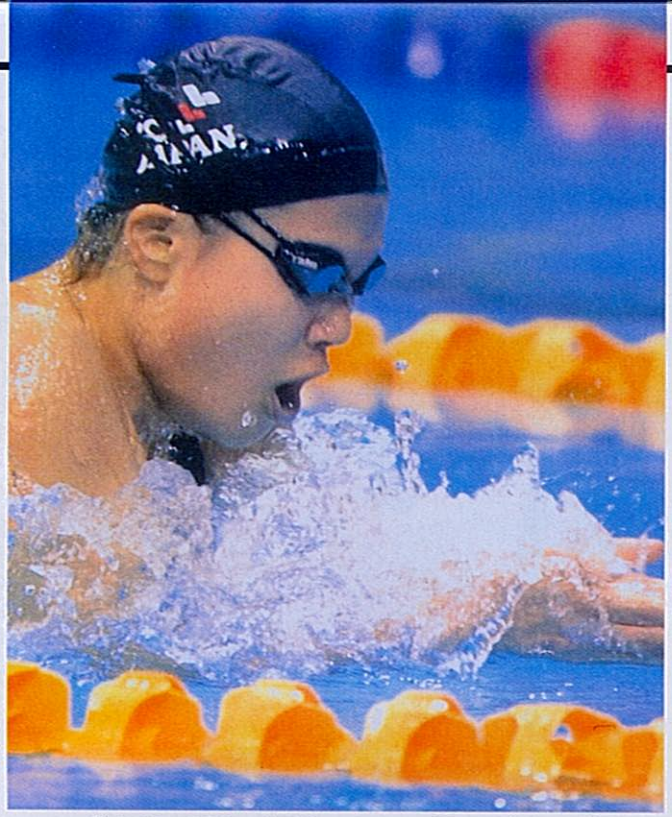
初戦からの戦いぶりに、マスコミや見ていた方はやきもきしたかもしれないけど、私はあの修士論文がずいぶん役立っているなと、むしろ、安心して見ていました。

田村が私の研究室にやってきたのは3年前の秋。「女子柔道を世界中に伝え、教えたい。そのために大学院でトレーニング科学を学びたい」ということでした。修士論文のテーマはシドニー対策にしようということで、田村が最も得意とする背負い投げを研究対象に「日本を代表する女子軽量級選手における体力要素と背負い投げの運動分析について」という研究テーマを決めました。その背負い投げの特徴を調べるために、国際試合でその技がきれいに決まったものと、それがかわされた時の比較をVTRを使って動作分析したところ、普通の選手の場合、技に入った瞬間が最高速度でその後はスピードが落ちていくのに、田村の背負い投げは相手が投げられる瞬間が最高速度になる、相手にとっては逃げにくい技だということが分かりました。さらに、外国選手攻略法として分かったことは、欧米選手は腰の位置が低く、重心が後方にあり、不用意に前へ出て組むと相手は腰を引いて重心が低くなる。そのため、返し技が強い外国選手と組む時は、相手を崩せる体勢でないといけないということでした。

ですから、シドニーにおいて彼女は無理に相手と組みにいくことはなかったのです。組み手に気を配り、4分の試合時間のうちの3分まではポイントを取りに行く冷静な作戦だったんでしょう。私も口を酸っぱくして、「組み手だけは気を付けろ！」とアドバイスしましたから。

修士論文は、外国選手に勝つにはどうしたらいいかという目的意識に貫かれていました。彼女には猛練習によって培った「心・技・体」に加えて、この修士論文の作成を通して「知」が加わったと思う。まさに、金メダルの栄光は、柔道の技と、技を通じて学業をも極めようとする田村のあくなき挑戦の証だと思います。

（10月1日世田谷キャンパスにて取材）



「五輪で金メダルを取る」と、はっきり口に出したのは小学校2年生の時。以来、いつも田島の頭の中は「五輪で金メダル」だった。9月16日、その夢に挑むために、田島は競泳会場アクアティック・センターのスタート台に立った。好きなパール入りの紫のマニキュアとペディキュアを塗って…夢には届かなかった。しかし、4分35秒96の日本新記録の銀メダル。それは自らのもつ日本記録を3秒以上も縮めるものだった。そのタフでアグレッシブな泳ぎは、「めっちゃ、くやしーです。金がいいですー」というコメントとともに、観る者に新しいタイプの日本人スイマーの登場を鮮烈に印象づけた。

PROFILE

たじま やすこ

1981年神奈川県生まれ。東京立正高等学校出身。日本体育大学体育学科1年生。水泳部・南光SS所属。

南光SSで水泳を始め、高校1年のとき、世界選手権400m個人メドレーで日本新記録を樹立、一躍脚光を浴びる。99年パンパシフィック水泳選手権400m個人メドレー2位、2000年4月の日本選手権400m個人メドレーで自己ベストを0秒32縮める4分39秒13のタイムで日本新記録を更新。シドニーでは個人メドレー（200m・400m）・自由形（400m）の3種目に出場。400m個人メドレーで4分35秒96の日本新記録で銀メダルを獲得、個人メドレー種目で男女を通じ日本初の五輪メダリストになる。

［水泳・400m個人メドレー銀メダリスト］

田島寧子を語る

西山裕美子

■南光スイミングスクール専任指導員

海外や大舞台で力を発揮するタイプなので、シドニーではメダルをとれると、確信を持っていました。口に出すとプレッシャーがかかる、と思ったので言いませんでしたが…。

彼女を直接指導するようになったのは、中学に入学した頃からですから、もう7年になります。ウエイトと、補強トレーニングとしてマシンを使用したり、エアロビクスの指導をしてます。マシントレーニングは全身の筋力アップで、一番は腹筋の強化です。彼女は、エアロビクスの方を楽しんでやっているようです。練習の合間には、映画の話とか新作ビデオの情報など、気分転換が図れるような話をすることもあって、私との間では結構リラックスした状態でトレーニングをしています。

藤森 善弘

■日本体育大学スポーツ局コーチ専門職

■シドニー五輪水泳コーチ

田島は、決勝レースが終わって戻ってきた時、私の顔を見るなり、「ごめんなさーい！2番だった、ごめんなさーい」と言って、泣き出すんです。だから、「バーカ、お前、すっごいいいタイムだったんだぞ。35秒だぞ。よく頑張ったな」と言ってやりました。本当に、田島はよく頑張ったと思います。

直前の8月に、持久力を高めるためにアリゾナ州で高地トレーニングを行いました。走ることは水泳選手は苦手ですが、富士山より少し高い山を走らせました。普通の人なら頂上近くまで行くと吐いてしまいますが、田島は適応能力があり、血液中の酸素濃度は低地と同じ数値でした。田島はそうしたトレーニングを含め、課題のブレスト（平泳ぎ）やターンを矯正するために、びっくりするほど練習しました。

だから、シドニー入り前のアデレードの合宿では、休養させ、総合的なチェックと最終的なメンタルトレーニングで良いイメージづくりを図りました。この合宿は、そうした最終調整をする一番重要なところでしたので、マスメディアにさらして集中力が途切れないよう一切日本に帰さず、またホバートでの日本チームの合宿にも合流せず、最後までマンツーマンで練習させてもらいました。

これが良かったのだと思います。試合前にマスメディアに騒がれると、若い選手は集中力が途切れ、プレッシャーに変えられてしまうことが多い。選手のプレッシャーは、コーチが取り除くものです。田島にもいろいろな話が来ましたが、一切断り、表に出さないように努めました。だから、外部とあまり接触せずアデレードからシドニーに入った田島は、「こんなにリラックスしてて、いいの？他の選手やコーチはいつもと違うよ？」と言うほど、緊張感は薄かった。実際、表立ってマスメディアに出なかった選手はベストタイムが出ていると思います。メダル獲得は、そのようなポイントと練習プランにあると思います。

まさに銀メダルは、戦略的にシドニー対策を立て、二人三脚でやってきたことの正しさの証だと思います。そして、過酷な練習メニューに、時にはプールで泣きながらも練習に励んできた田島の努力の賜物だと思います。決して楽に手に入れたものではありません。だからこそ、もっと何かいいものを田島にあげたいほどです。

（10月13日南光スイミングスクールにて取材）

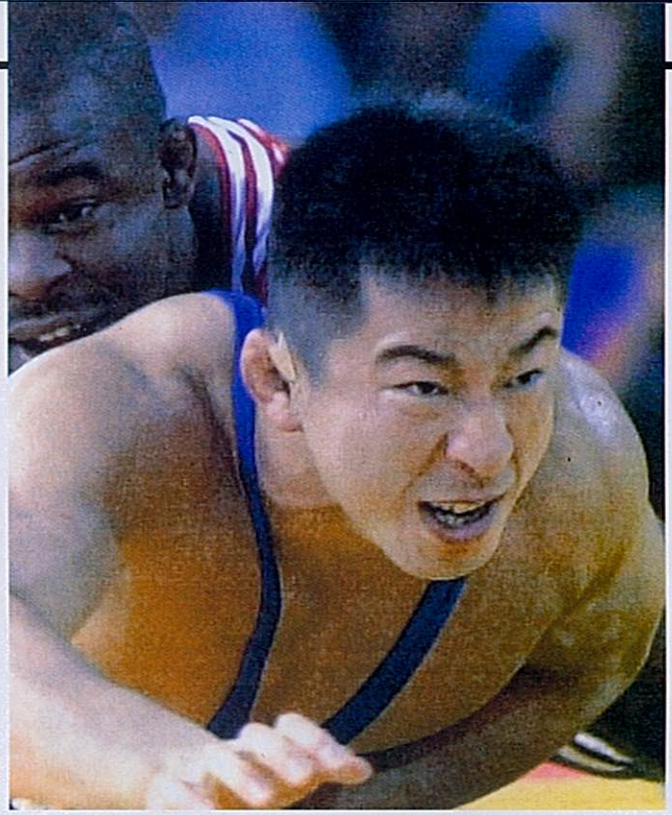
水を掻くプルの力だけは、世界一だと思います。

このトレーニングでは、40％くらいの力を出してくれればいいと思っています。水から上がってウエイト補強トレーニングまでも、藤森コーチがマンツーマンで指導すると、彼女は全く気が抜けない状態になってパンクしてしまい、メンタル面で良くないからです。私とでしたら、自分の我を出して、つっかかったり、「もうやりません」とか、言いたいことがある程度言えるので、ストレスが発散できますから。

彼女の長所は、気持を切り替えたときの集中力の高さです。それは、すごいものがあります。短所は、練習などで辛すぎると逃げに入ってしまうことです。甘えてしまうんでしょうね。

肉体的に、他の選手と比べ圧倒的に秀でているところがあります。上半身の引く力、水を掻く力です。体をフラットな寝ている状態にして、ものを引っ張るという力は凄いと思います。泳ぎの中の引く力は下手な男子より強いですよ。プルの力だけでしたら世界一ではないでしょうか。実際、陸上で手を伸ばした状態からプッシュまでの数値をコンピューターなどで出すと相当なものです。だから、あとは脚力がもう少し腕ぐらい強くなって欲しいですね。そうすれば、驚異的なスイマーになると思いますね。

（10月13日南光スイミングスクールにて取材）



視線の先には、いつも兄がいた。
兄を追いかけ、高校から始めたレスリング。
無名の弟は大学王者となり、日本選手権を連覇する。
兄が立てなかった五輪の舞台に弟は立ち、
世界の銀メダリストになった。
表彰台では、プロレスラーの兄がよくする敬礼ポーズをしてみせた。

PROFILE

ながた かつひこ
1973年千葉県生まれ。
1996年3月日本体育大学体育学科卒業。
警視庁第6機動隊。
中学までは野球部に所属していたが、成東高校1年からレスリングを始める。高校時代は県大会2位。兄の影響で日体大に入学後、2年で新人戦に優勝、3、4年は大学王者になる。97年から日本選手権69キロ級3連覇、2000年アジア選手権優勝。兄はプロレスラーの永田裕志。

[レスリング・グレコローマン69キロ級銀メダリスト]

永田克彦を語る

永田 裕志
■新日本プロレス所属プロレスラー

写真提供:新日本プロレス

安達 巧
■日本体育大学スポーツ局コーチ専門職
■シドニー五輪レスリング支援コーチ

レスリングは、今は日本一になっても五輪に出られません。世界8位内かアジアの1位、あとはトライアルの5大会で総合7位内に入らなければ出られないのです。永田は日本選手権で3連覇していても、世界での成績は最高で16位。トライアル5大会を連戦して、やっと7番目の枠で出場できたんです。だから、始まる前は、何とか頑張って入賞してくれれば、というのが正直な思いでした。それが、「何の気負いもなく、思い切って行きます」と言ったように、プレッシャーとは無縁で、あれよあれよの銀ですから、驚きました。もっとも、当の本人も思いがけなかったようですけど…。

弟から「大学でレスリングをやりたいんだけど」、と相談を持ちかけられた時は、さすがにビックリしましたよ。高校時代、弟は県大会で2位に入っただけで、全国大会3位内に入った実績のない選手でしたから。でも、日体大レスリング部は将来性を買って入れることもあり、そうした選手を大学でチャンピオンにするのを売りにしていたので、部の先生に相談したんです。すると、「お前の弟なら、頑張ってやれるだろうから、大丈夫だろう」というすすめもあって入部しました。

弟のレスリングの特徴は、日体大の特徴でもあるんですが、差し手に強いこと。組み手で掴まえ、崩して、疲れさせ、堅実に一点一点ポイントを稼いでいくスタイルなんです。グラインド(パーテールポジション)からのポイントを確実に取れること、横くずし(ローリング)を掛け確実にポイントを上げていけるのは、弟の長所ですね。あいつは、日本人としては体格のしっかりした方ですが、外人はもっと体が大きい。その外人相手に、そうした攻めを確実にできるのはすごいと思いました。負けはしましたが、決勝戦で本来一階級上でやるべき選手と当たり、確実に持ち上げた時は、ビックリしました。総じて、よく研究してましたし、その成果は表れましたね。

確かに、シドニー出場までの弟の道のりは幸運もありました。でも、その幸運を味方にトライアルで7位が確定して、選ばれてからは自信も力もついたと思います。私が4位だったアジア選手権で弟がチャンピオンになった時は、確実に力を伸ばしているな、と分かりました。でも、シドニーでここまでやれるとは、思いませんでした。正直、決勝リーグに進出できればいいところだな、と思っていましたから。本当に、観戦した両親には、いい親孝行をしたものだと思います。

(10月18日電話にて取材)

シドニーで、ここまでやれるとは思いませんでした。

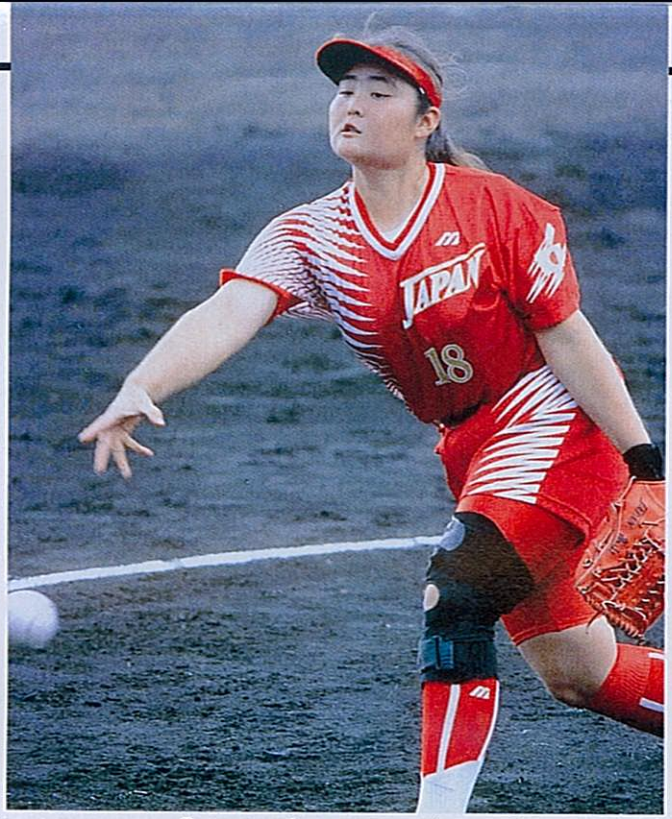
高校時代無名でも、五輪に出て、メダルを取れるよい見本。

だから、準決勝でロシアに勝った時点で、僕はある程度満足してたし、本人もそうだったと思う。レベルの高い欧州選手権で2連覇した選手に対し、まぐれでなく、自分でしっかり取った技で勝ったわけですから。永田も「胸をはって威張れる銀メダルだ」、と話してました。

永田は、自分のレスリングスタイルを持っています。それは、差し手から入っていって前に出て、相手のパーテールポジションをとってローリングで回す形で、差し合いの強さと失点の少ないガードの堅さに特徴があります。だから、その形にはまれば強いが、逆に、差し手が空回りして相手にパーテールをとられ、先にリードされると、焦ってバタバタしちゃうのが欠点です。だからどうしても先取ポイントを取りたい。先取点をとってリードすれば、永田の展開になる。先行逃げ切り型ですね。

永田の銀メダルは、今の学生をずいぶん勇気づけました。兄貴の方は、高校時代、全国大会で成績を上げて日体大に入ってきたけど、弟は、高校時代はインターハイも国体も出てない、無名の選手。その無名だった弟が、一生懸命やって、あと一勝のところで五輪に出れらなかった兄貴の想いを、叶えてくれた。もちろん、その努力は並み大抵ではなかったと思う。まさに、高校時代そんなに成績がなくても、スタミナ・体力をつくり、努力の仕方で五輪に出場できる一番いい見本だと思います。

(10月14日健志台キャンパスにて取材)



オリンピック種目として、ソフトボールが初めて採用されたアトランタ。高山樹里は19歳で五輪のマウンドに立った。あれから4年。決勝戦こそ惜敗したものの、8連勝の日本代表は一大旋風を巻き起こした。そのマウンドには、大黒柱として先発に抑えにフル回転する高山がいた。強打者を相手に、どんな場面でもひるむことなく投げ込む、冴えたライジングボールを武器に。

PROFILE

たかやま じゅり
1976年神奈川県生まれ。
1999年3月日本体育大学体育学科卒業。
豊田自動織機。
高校3年の国体優勝で速球投手として注目され、日本体育大学に入学。1年生で全日本大学選手権優勝、世界ジュニア選手権2位。2年生で2年先輩の持田京子捕手と共にアトランタ五輪に出場、4位。4年生の98年、世界選手権3位。シドニーでは、エースとして先発に抑えにフル回転し日本チームの銀メダルに貢献。個人成績は5勝1敗、防御率0.30、奪三振数26。

[ソフトボール銀メダリスト]

高山樹里を語る

松島 京子 さん
(旧姓持田)
■アトランタ五輪4位
■埼玉県立羽生実業高等学校ソフトボール部監督

テレビを通して観戦、応援してましたが、相変わらずマウンドでの姿は堂々としていて、バッテリーを組んでいた学生時代と変わってないな、と思いました。ただ、決定的に変わったのは、コントロール。非常によくなり、失投が少なくなったように思えます。卒業後、代表チームの合宿や海外遠征などでもまれながらレベルアップを図り、正確なコントロールを身につけてきたからでしょう。

高山とバッテリーを組み始めたのは彼女が入学してきてから、私が3年の時です。入部した時から堂々としていて、1年生とは思えない独特の雰囲気をもった存在でした。球は、スピードだけでなく、キレもありました。

小川 幸三 教授
■日本体育大学ソフトボール部部長

高山はもともと高校時代から定評のあるいいピッチャーで、入学した頃から球の速さはすごかった。でも、1年春のリーグ戦決勝戦で東京女子体育大学と対戦し、何と押し出しのフォアボールを出して負けるほどの荒れ球でした。持田が3年の時、二人はバッテリーを組むようになりますが、その持田との2年間で、高山はピッチャーとして必要な駆け引きなど大事なことを学んだ、と思っています。

シドニーでは、すいぶん神経を使ってコースに投げ分けてました。スピードは、学生時代より速くなってますし、コントロールが本当によくなりました。それと、ボールから入って打ち気にはやるバッターの気をはずすなど、投球術が上手になりました。米国との試合では、ホームランを打たれる危険性が高いので、簡単にストライクを取りにいかない。2ストライク3ボールにする。それも彼女の計算の内ですよ。

そうした投球術は、社会人になってから一層磨かれましたね。大学時代は高山のボールなら少々コースが甘くても打たれることはないけど、社会人では甘いコースは一発打たれる。また、同じ豊田のチームに在籍しているM・スミスに対して負けたくないという気持ちも大きい。そうしたことが、レベルアップにつながったと推測してます。それは、予選第3戦の米国戦で、日本のエースとして米国のエース、スミスに投げ勝った時、「あんなに高山が跳び上がって喜ぶ姿、初めて見ました」と豊田の監督に言わしめたことからもうかがえます。

高山は、普通のピッチャー以上に努力してます。ランニングやウエイトトレーニングや筋力トレーニングなど、そうした努力と普段の生活の節制、これがなかったら今日の高山はないと思っています。

宮本武蔵の『五輪書』に「守・破・離」という言葉がありますが、「守」は指導者からのピッチングのノウハウを遵守する中学・高校時代。「破」は更に上達するためにその殻を破って自分のものを創る時期で、大学時代にあたり、「離」は免許皆伝をもって独り立ちする時期です。シドニーでの投球を見たとき、「高山流ピッチング」ともいうべきものを問える、その「離」の時期に来た、という思いです。

(10月12日世田谷キャンパスにて取材)

物おじしない、堂々たる風格は、学生時代からのもの。

ただ、今ほど抜群のコントロールではなかった気がします。2年間バッテリーを組み、二人でアトランタ五輪にも出場しましたが、非常にリードしやすく、キャッチャーとして楽しかったピッチャーですね。コントロールがいいだけでなく、打たれても平然としており、変に気をまわさなくてもいい。信頼して投げてくれたと思うんですけど。

高山は、本当にピッチャー向きの性格だと思います。例えば今回のシドニー、予選3戦目のアメリカ戦で1点リードした延長11回の裏に、ツーアウト満塁でカウント・ツースリーという絶体絶命の大ピンチを迎えます。もう、あそこまでいくと気迫しかない。最後は外角一杯のライジングボールで見逃しの三振で切り抜けますが、彼女には、どんな場面でも物おじしない、精神力の強さがあります。

理想のピッチャーというのは、コントロールが良く、心の中は別にして、喜怒哀楽をあまり表に出さず、いつもタンタンとして投げるタイプ、だと思います。高山は、それらを満たしているピッチャーと言えます。

(10月23日キャピトル東急ホテルにて取材)

「守・破・離」の「離」の時期にきた、高山の投球術。

シドニー五輪大会に出場して

[出場者メッセージ]

太田陽子
（走り高跳び）
とにかく楽しかった。だめでもともとの気持ちで臨んだことが、良かったと思う。シドニーで得られたものは…内緒です。自分では、上出来の大会だっと思う。結果が良すぎると恐いですからね。

笹本　睦
（レスリング・グレコ58kg級）
今回の五輪は、今後の競技生活においていい勉強になったと思う。特に緊張はしなかった。次のアテネも是非出場したい。五輪はいつもの国際大会の延長みたいだった。

笠松昭宏
（体操競技）
五輪はやはり大きな大会なので、演技していて気持ちよかったです。緊張はしたけど、程よい感じで演技には影響しませんでした。

仲嘉真理
（ウエイトリフティング・53kg級）
とりあえず、五輪が終わってほっとしています。成績には満足していませんが、自分に足りないものが分かったことだけでも収穫がありました。競技中は緊張していないと思ったのですが、実は緊張していました。今は周囲の方の反応が五輪前と違うので戸惑っています。

舛田圭太
（バドミントン）
結果としては、一回戦で負けたけどその相手が銅メダルを取ったので、まぁ仕方がないかなと思っています。それでも、五輪の凄さを体で感じることができたのは嬉しかったです。絶対、アテネには出たいです。

高山樹里
（ソフトボール投手）
五輪に二度も出られたことは素直に嬉しいです。でも、反省することも一杯あるのでそれを克服して今後の競技生活に活かしたいです。五輪に出場して、たくさんの方と出会い、話すことができたことは自分の財産です。

永田克彦
（レスリング・グレコ69kg級）
五輪に出ることがとにかく夢だった。しかも銀メダルまで取ることができて、とにかく感動しました。失うものはなにもないというつもりで、やるだけやりました。とにかく、銀メダルという形になったことで、満足感に溢れています。

田島寧子
（水泳・競泳）
帰ってきて、街を歩いていても声をかけられるようになったのにはビックリ。とにかく、自分にとっていい経験だったです。銀メダルという結果は、悔しさの中から生まれた、嬉しさという財産だと思う。今はゆっくり休みたいです。

川合達夫
（レスリング・フリー85kg級）
外国人はグラインド（寝技）でも粘りがある。これが実力。ここに来るまで練習を積んで、努力した。それも含めてオリンピックだと思っている。

片山貴光
（レスリング・グレコ76kg級）
入賞したかったけど、自分のいいところを全部相手に消されてしまった。年齢的にも最初で最後の五輪と思って臨んだ。素質ある選手も多いし、この気持を後輩に伝えたい。

田南部力
（レスリング・フリー54kg級）
相手のパワーがすごい。2階級ぐらい上と試合しているような気分でした。オリンピックは全部が自分にとって財産となった。こんな幸せな経験はない。もう一度チャンスをもらいたい。

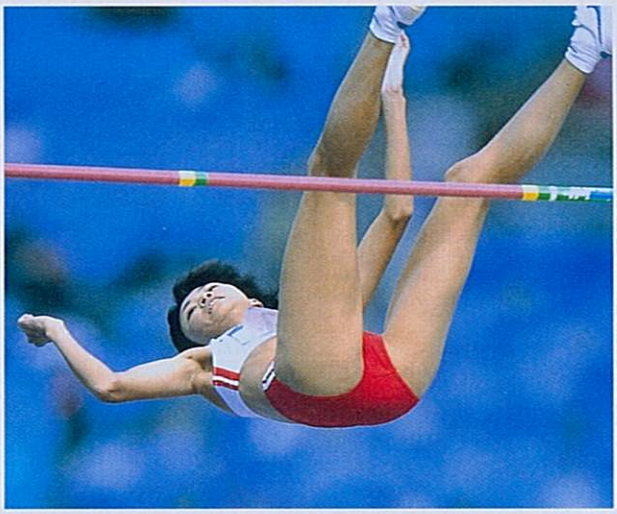
川嶋伸治
（陸上・マラソン）
負けたからって落ち込んではいられません。今後は練習メニューも自分で考えてみたい。もう一度初心に戻ってきっちりマラソンをやりたい。

中田大輔
（トランポリン）
けがは言い訳にしません。実力不足です。トランポリンはまだ五輪では始まったばかりの競技ですが、温かい目で見てほしい。僕もこのままでは終れない。大きくなって五輪に戻ってきます。

田村亮子
（柔道・48kg級）
これからは、一年一年、リラックスしながらやっていきたい。まず、来年の世界選手権での5連覇を、3年後はアテネ五輪代表を目指します。そして10年後は、結婚して、好きなことができていれば…。

＊川合選手、片山選手、田南部選手、川嶋選手、中田選手、田村選手のコメントは、本人のコメントを各種新聞報道から抜粋したものです。

[column シドニーに舞う！]



[陸上競技女子走り高跳び11位]

太田陽子

1m96への果敢な挑戦は、賭けでもあったんです！

太田がファイナルで1m90をクリアーした後1m93をパスし、1m96にチャレンジしたのは、勝負に出たからなんです。入賞は8位まで。8位の選手は1m93です。たぶん一発で跳んでて、前の選手も1m95を一発で跳んでるとすれば、結果的には9位より下になってしまう。そうすると1m93にチャレンジして、跳んだとしても入賞じゃないんです。それだったら1m96を一発で跳べば5位に入るんですよ。で、その勝負に賭けたわけです。

それは、僕の指示ではなく、太田の意志でした。むしろ、僕の方は93を跳んでから96でもいいかなって思っていました。しかし、太田は、気持ちを高めて集中して跳ぶ選手。96を跳ぶという気持ちになっている時に、「止めなさい」と言ったら跳べなくなっちゃいます。まして、「やってみなきゃ、わかんない」という選手。だから、もうイケイケでした。特に僕自身、他の指導者と違って先生っぽくせず、あくまで選手中心という方針を貫いていましたから。

結果は、1m90で11位。しかし、高校時代から太田を10年以上見てきて、あんなにいい顔で競技して、いい顔で終わった試合というのは見たことがありません。

（10月17日、湘南工科大学附属高等学校にて取材）

PROFILE

おおた・ようこ
1975年兵庫県生まれ。1997年日本体育大学体育学科卒業。ミキハウス。中学時代、1m75を記録。大学1年の19歳で、1m93の日本のジュニア記録をつくる。シドニーでは、日本選手として8年ぶりの決勝進出を果たす。自己記録1m94。

宮尾 勉 氏
■湘南工科大学附属高等学校教諭
■シドニー五輪陸上競技支援コーチ

大会出場者DATA

選手	氏名	種目①	種目②	成績	所属①	所属②
1	田村亮子（たむら・りょうこ）	柔道	48キロ級	金メダル	大学院博士後期課程	トヨタ自動車
2	笠松昭宏（かさまつ・あきひろ）	体操	体操競技	4位	大学院博士前期課程	徳洲会
3	舛田圭太（ますだ・けいた）	バドミントン	シングルス	2回戦	学部4年生	
4	田島寧子（たじま・やすこ）	競泳	400メートル 個人M	銀メダル	学部1年生	南光SS
			400メートル 自由型	予選		
			200メートル 個人M	予選		
5	田南部力（たなべ・ちから）	レスリング	フリー 54キロ級	10位	警視庁	
6	川合達夫（かわい・たつお）	レスリング	フリー 85キロ級	17位	群馬県・板倉高校	
7	笹本睦（ささもと・まこと）	レスリング	グレコ 58キロ級	8位	綜合警備保障	
8	永田克彦（ながた・かつひこ）	レスリング	グレコ 69キロ級	銀メダル	警視庁	
9	片山貴光（かたやま・たかみつ）	レスリング	グレコ 76キロ級	17位	自衛隊	
10	川嶋伸次（かわしま・しんじ）	陸上競技	マラソン	21位	旭化成	
11	太田陽子（おおた・ようこ）	陸上競技	走り高跳び	11位	ミキハウス	
12	中田大輔（なかた・だいすけ）	体操	トランポリン	予選	金沢学院大学	
13	高山樹里（たかやま・じゅり）	ソフトボール	投手	銀メダル	豊田自動織機製作所	
14	仲嘉真理（なかが・まり）	ウエイトリフティング	53キロ級	7位	自衛隊	

役員	氏名	種目	役職		所属	
1	村上哲朗（むらかみ・てつろう）	体操競技	監督		東洋英和女学院大学	
2	村上千佳子（むらかみ・ちかこ）	体操競技	審判		成城学園中学校	
3	後藤洋一（ごとう・よういち）	体操競技	審判		(財)日体スワロー	
4	遠井稔男（とうい・としお）	バドミントン	監督		(財)日本バドミントン協会	
5	関根義雄（せきね・よしお）	バドミントン	コーチ		日本体育大学	
6	高田裕司（たかだ・ゆうじ）	レスリング	監督		山梨学院大学	
7	安達巧（あだち・たくみ）	レスリング	支援コーチ		日本体育大学	
8	藤森善弘（ふじもり・よしひろ）	競泳	コーチ		日本体育大学	南光SS
9	河野徳良（こうの・とくよし）	野球	トレーナー		日本体育大学	
10	中村勝彦（なかむら・かつひこ）	野球	総務		(社)日本野球機構	
11	大森重宣（おおもり・しげのり）	陸上競技	コーチ		星稜女子短期大学	
12	宮尾勉（みやお・つとむ）	陸上競技	支援コーチ		湘南工科大学附属高等学校	
13	立入彰修（たちいり・あきのぶ）	アーチェリー	コーチ		草津東高校	
14	五百蔵正雄（いおろい・まさお）	アーチェリー	コーチ		甲南女子中・高校	
15	福井卓也（ふくい・たくや）	トランポリン	コーチ		金沢学院大学	
16	加藤仁（かとう・ひとし）	ウエイトリフティング	女子監督		埼玉栄高校	
17	関口脩（せきぐち・おさむ）	ウエイトリフティング	女子コーチ		日本体育大学	
18	細谷治朗（ほそたに・じろう）	ウエイトリフティング	男子コーチ		日本体育大学	
19	櫻井勝利（さくらい・かつとし）	ウエイトリフティング	審判		浦和市民体育館	
20	知念令子（ちねん・れいこ）	ウエイトリフティング	審判		日本体育大学	
21	山本洋祐（やまもと・ようすけ）	柔道	女子コーチ		日本体育大学	
22	藤井まり子（ふじい・まりこ）	ソフトボール	コーチ		(財)日本ソフトボール教会	
23	小松一憲（こまつ・かずのり）	セーリング	監督		(財)日本セーリング教会	
24	瀬戸山正二（せとやま・しょうじ）	ビーチバレー	監督			

『海外研修旅行』に参加して ◎ 田邊詠津子 健康学科4年

競技の感動、美術館巡り、五輪一色に染められたシドニーの街の散策、どれもが忘れられない5泊7日のツアーでした。

今回の研修旅行に参加したいと思った一番の理由は、同じ日体大のキャンパスで学ぶ仲間が、五輪という世界最大のイベントに出場するというので、ぜひ応援しなくては、と強く感じたからです。また、4年に一度しか開催されない大会であり、見に行くことが一生の財産になるかもしれないと思ったからです。
旅行代金は頑張ってバイトしたお金をあてました。

旅行の行程は、9月16日から22日までの機内泊を含む5泊7日。ツアー客17名、添乗員1名のツアーでした。

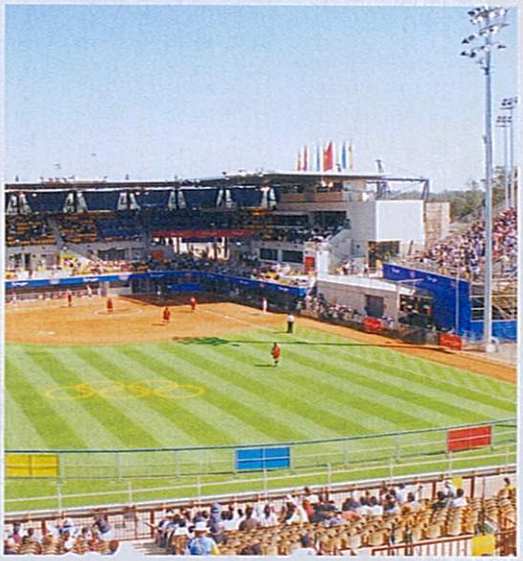
9月16日午後6時30分に成田に集合し、夜の便でシドニーへ向かいました。機内では、これから訪れるシドニーやゴールドコーストでの行動予定をあれこれ考え、あまり眠れませんでした。以下の文章は、その日その日に感じたことや観た競技・行動をノートに記してたものです。

[9月17日]
午前8時45分、フライトはそれほどの遅れもなく、シドニーに到着した。快晴。日差しが眩しい。しかし、日陰にはいると少し寒い。日本とは違って湿度が低くて、カラッとしていて過ごしやい。ホテルでチェックインし、ツアーメンバー全員で昼食を食べに行く。午後、女子の体操競技を観に行く。ツアーに体操の池田先生が来られたので、ありがたいことに解説付きの観戦となった。審査のポイントがどこにあるのかが分かって、面白い。それにしても、会場で間近に選手を見るのとTVで見るのでは、迫力が違う。私の席は平均台や床演技の前なので、ロシアのロバズニュクやのザモロドチコワ、ルーマニアのアマナールの演技がよく見える。「凄い」の一言。
夜は、ホテルに戻って、ウェルカムパーティー。

[9月18日]
午前中、ハーバーブリッジやオペラハウスなどの観光地を巡った。現代アートの美術館、州立美術館などを見て廻り、かなりシドニー市内に詳しくなった。
柔道を観にダーリングハーバーへ行き、女子57kg級の試合を観戦。日下部選手の銅メダルのシーンには興奮し、スタンディングオベーションする。観戦中、田村選手がスタンドまで上がってきてくれ、写真を学長先生と撮っていた。お願いする勇気が無く、絶好のチャンスを逃してしまった。

[9月19日]
今日は、楽しみにしていた水泳の観戦日。田島選手の応援をすべく、日体大の旗を持って競泳会場に行く。しかし、田島選手は予選落ち。現地では日本選手の情報がなく、日本に電話してそれを知った。せっかく持参した旗だったのに出番がなくなった。会場は超満員だった。オーストラリアの星イアン・ソープが、彼の最後の種目、800m自由形リレーの第一泳者として登場する日だった。会場の応援がすごい。ライブコンサートの会場のように、地響きを立てて揺れる。

[9月20日]
日本対ブラジル戦を観るために、飛行機でブリスベーンに移動する。サッカーを観るのは初めて。スタジアムは9割以上が日本人で、日本の国立競技場にいるみたいな感覚に陥る。後半の終盤近く、「南ア負ける」の情報が回ってきた。これで日本は決勝トーナメントに進出できる。サッカーファンではないのに、一緒に興奮してしまった。



[9月21日]
この日は、各自自由行動の日。憧れのゴールドコーストの海に、ボディーボードの講習を受けに行く。少し寒かったが、青い海、白い砂浜を満喫した。
夜、現地の人がよく行くタイ料理のレストランで食事を取った。意外に、おいしかった。

[9月22日]
最終日。朝5時にモーニングコールで起こされる。眠い。6時出発で8時のフライトはハードだ。機中ぐっすり眠ったまま、成田に午後4時過ぎに到着でした。

残念ながら日体大の選手の活躍のシーンは見られませんでしたが、4年に一度の祭典を自分の目で生で見ることができて感動しました。どのシーンも、ついスタンディングオベーションしてしまいました。

街全体も五輪ムード一色で、楽しめました。公園では常に何かイベントが開かれていましたし、いい思い出になったことは確かです。

（10月12日世田谷キャンパスにて取材）

●『海外研修旅行』について

『海外研修旅行』は、1984年に「夏季欧州スポーツ国際交流研修旅行」として再開され、ヨーロッパに6回、1996年の「米国研修とアトランタオリンピック視察旅行」等アメリカに2回、そして本年度は「第27回オリンピック競技大会（2000年シドニー）研修ツアー」として実施された。その間、湾岸戦争等の影響を受け、中断を余儀なくされた時期もあったが、学生の参加を主体として教職員・保護者会が、そして今回は同窓会とも連携を図りながら、学生部で企画・実施されている歴史のある海外研修旅行である。

主な研修先としては、名の知れた都市の観光は勿論のこと、多くの大学を訪問し、施設・設備の見学等を行い見聞を広めている。また、本学と交換留学制度を持つドイツ体育大学ケルンでは、講義などにも参加させていただいている。

今後も様々な企画を立て、この『海外研修旅行』をより充実させたものとしたい。（学生部）

優勝回数14。卒業までに久島さんのもつ記録に近づきたい。

垣添 徹
（武道学科4年相撲専攻・相撲部）

―相撲を始めた時期と、やるようになった理由を教えて下さい。

●大分県は、元々相撲が盛んなんです。宇佐地区も例外でなく、小さい頃から「わんぱく相撲」をみんなやっています。だから、僕も小学生の頃から「わんぱく相撲」に出場していました。部活として正式に相撲を始めたのは、中学時代からです。それは、祖父の勧めと、何より「わんぱく相撲」の勝利の味が忘れられなかったからです。

―高校進学にあたって、宇佐産業科学高校を選んだ理由は？

●宇佐産業科学高校は中学校から場所も近かったので、よく稽古に行ってました。進学にあたっては、明徳、関大一、埼玉栄などの高校からのスカウトもありました。正直、かなり迷いました。最終的には、自分で決断しました。理由は、中学時代から何度か稽古に行っていましたし、慣れた環境での練習の方がいいかなと思ったからです。監督は、日体大OBの真砂先生という方でした。

―高校では素晴らしい成績を上げているので、大学進学の際は誘いも多かったと思います。日体大に進学した理由は？

●大分県は日体大OBが多いんです。日大はかなり積極的でしたが、高校時代から何度か日体大で稽古をつけてもらい、自分に合っている環境だなと感じましたから。稽古の雰囲気がいいですよね。それと、高校時代の先輩（二学年上）がいたのも頼もしかったです。

―垣添さんの相撲の特徴と、主将としての苦労・喜びなどについて、聞かせて下さい。

●自分の相撲の型は、前に出る突き押しです。いっぺんに相手を持っていく早い相撲が信条で、時には張り手も出します。懐の大きな相手が苦手なので、さらに自分の型の完成を追究していきたいと思ってます。

相撲部の部員数は、現在40名くらい。3年秋から主将をやってますが、悩みは、常に見本を下の学年の者に見せなくてはいけないことです。私生活でも、稽古でも、常に見られていると思うと、力が抜けませんね。主将としては、昔ながらの「上下関係の風潮」があまり好きでないので、止めるよう注意してます。今年の東日本選手権団体戦で日大の17連覇を阻むことができたのは、個人タイトルはならずとも主将として何より嬉しかったです。

―4年間を振り返っての日体大についてコメントと、当面の目標と将来の夢を聞かせて下さい。

●精神的なことも含めて、環境が良かったことが一番です。とにかく、それが大きいですね。相撲の大会は年間20試合弱ありますが、当面の目標は、大学に入学してから優勝したタイトル総数が14なので、卒業までに一つでも増やして、久島さんの28の記録に少しでも近づきたいです。将来は、まだわからないですが、プロへは憧れています。

（10月10日、世田谷キャンパスにて）

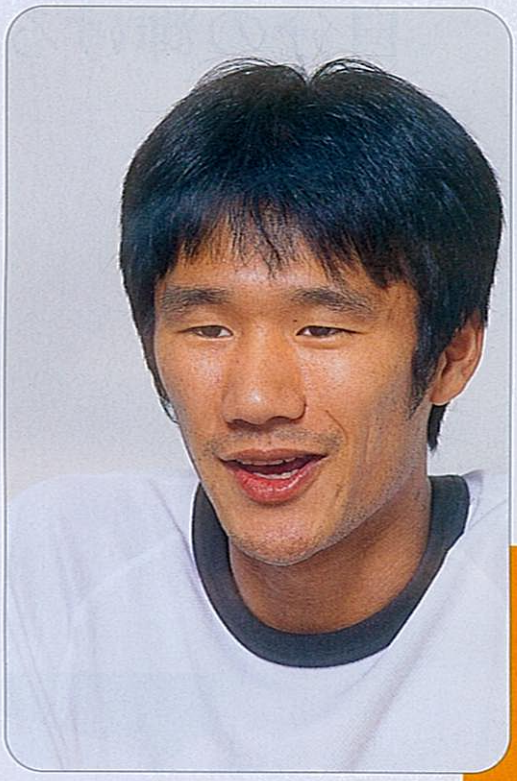
PROFILE

かきぞえ・とおる ●1978年、大分県生まれ。
大分県立宇佐産業科学高校出身。
武道学科4年相撲専攻。
高校2年は全国新人大会優勝。高校3年はインターハイ3位、東西対抗の無差別級・重量級の2階級で優勝、金沢大会3位。
日体大入学後の1年次は東日本学生相撲選手権の新人戦優勝。2年次はアジア大会優勝。
3年次はインカレ3位／世界選手権準優勝など、タイトルを5個取得。4年次は東日本学生相撲選手権団体戦で日大の17連覇を阻み、初優勝。国民体育大会成人A個人優勝。インカレ個人優勝（学生横綱）突き押し相撲を得意とする。
身長177cm、体重135kg

アテネオリンピックに出て世界のレベルで勝負したい。

久保 武大

（体育学科4年・ボート部）



—先ず、ボート競技（漕艇）について簡単に教えて下さい。

●スカルは小さなオールのことで、ボート競技には、1人で漕ぐシングルスカル、2人で漕ぐダブルスカル、4人で漕ぐクオドルプルスカル、8人で漕ぐエイトなどがあり、軽量級と重量級に分かれてます。男子の軽量級は70kgまでなんです。僕は72kgですが、いつもレースの直前にウエイトを落とし、軽量級に出てます。重量級の世界でトップクラスの選手は2mで100kgあるって人がざらなんです。ですから、日本人ではちょっと体格的にかなわないですね。そのため、日本はオリンピックで軽量級を強化しようとしてます。

—ボートをやるようになったキッカケは？

●ボート部がある中学校は少ないため、ボートは高校から始める人がほとんどです。僕も高校1年の時からです。高松高校では、県の国体の強化種目として、僕の入る2年前に部がつくられました。入部のきっかけは、小さい頃から運動するのが大好きでしたので、進学校に入っても体を動かす趣味程度のつもりで気軽なスポーツをやっていこうと思っていたところ、たまたま身長が大きいということでボート部に誘われ、入ってみたのです。でも、始めたら熱が入っちゃって…、今日まできてしまったわけです。

—日体大に進学した動機・理由は？

●「うちの大学に来ないか」というオファーはいろいろありましたが、日体大を選んだ一番の理由は、大学に活動を制限されないということです。というのも、他の大学は、インカレでいい成績を残すというのが一つの大きな目標だったりする。でも僕は、大学生という枠ではなく世界のレベルで勝負したいなと思っていたんです。先日、シドニーオリンピックがありましたが、それに出場してメダルをとるというのが目標で、それに向けての活動ができる環境にあるのが、まさしく日体大だったんです。

—ボートの魅力と、今までやってきて一番思い出深いことは？

●僕にとっては、とにかく高いレベルで争うということが楽しいんです。もちろん、単純にボートを漕ぐこと自体も楽しくて大好きなんですけど。でも、やっぱりレースが好きなんですよね。一番の思い出深いことは、高校2年生の時、世界ジュニアで日本代表になれたこと。やっぱり日の丸をつけて世界で戦うというのは憧れでしたし、中学生までの自分じゃ想像できなかったですから。この前の世界選手権でチャンピオンになったのも思い出ですけど、それは2番目ですね。

—今後の目標と将来の夢を聞かせて下さい。

●実業団チームは基本的にエイト（8人乗り）しかなく、国内で競うのが普通です。だから、実業団には入らず、大学院の試験を受け、合格すれば引き続き学生ボートをやっていきたいです。将来は、現場のコーチではなく、そのコーチをサポートする学者になりたいなと思ってます。特にボートにはこだわってませんが、トップアスリートに触れていたいですね。選手としては、やっぱり、アテネオリンピックに出て、世界のレベルで勝負をしたいです。

（10月10日、世田谷キャンパスにて）

PROFILE

くぼ・たけひろ ●1978年、香川県生まれ。
香川県立高松高校出身。
体育学科4年。ボート部所属。
高校2年生で日本代表として世界ジュニア選手権に参加、ダブルスカル10位。
大学1年次：全日本軽量級選手権ダブルスカル優勝、アジア選手権シングルスカル3位。
2年次：ベルギーで行われたワールドカップ軽量級ダブルスカル12位。世界選手権軽量級シングルスカル18位。
3年次：全日本選手権クオドルプル優勝。ワールドカップは準決勝敗退のため順位ナシ。インカレはシングル優勝。シドニーオリンピックのアジア大陸予選シングルスカル3位。
4年次：全日本選手権シングルスカル3位。クロアチアで行われた世界選手権で軽量級クオドルプルにナショナルチームで出場、日本ボート初の世界チャンピオンになる。
身長183cm、体重72kg

西永 昌人さん

プルデンシャル生命保険株式会社
シニア・コンサルティング・ライフプランナー
［1988年3月体育学科卒業］

フィールドは違っても、ヘッドハンティングされて、自分の輝ける場を見つけたことは喜びです。

“ヘッドハンティング”という言葉を知っているだろうか?さまざまな業界・業種で活躍している優秀な人材を引き抜き、スカウトすることだが、昨今、流行でもあり耳にはしたことがあるにちがいない。しかし、自分が当事者になることはやはりまだ少ない。その数少ない経験をされたのが、西永さんである。

西永さんは、大学卒業後、第一志望の大手旅行会社に入社した。しかも、入社式では栄えある新入社員総代としてスピーチまでしている。そんな望んで入った会社なのに、何故転職を?「当時働いている時は不満は全くなかったですね。仕事は楽しく、営業成績は上がり、人間関係も悪くなかったですから」。しかし、入社して6年半が過ぎたある時、「ぜひ一度お会いしたい」とかかってきた一本の電話が彼の人生に転機をもたらした。それは、彼の全く知らない米国最大の生保会社のヘッドハンターからだった。もちろん「最初は、転職する気などさらさらなく断わりました」。しかし、セッションに3回誘われるうちに、生保の果たす社会的意義に感動し、仕事観も変わっていった。「ライフプランナーという仕事は、お客様とその場限りのつき合いではなく、一生涯つき合っていく仕事。しかし旅行会社の場合、良いお客さんに出会えたとしても、一生涯のつき合いはなかなか難しい」と。

そうして西永さんは転職を決意するのだが、転職には以前の実績を捨て、一から出直すリスクを覚悟しなければならない。一時は、さすがに転職をよそうと思ったという。しかし、魅入られたように試験にチャレンジし、2回の面接を経て94年11月に入社した。

この会社のライフプランナーは、全員中途入社だそうである。みな他の業界・業種で活躍していたバリバリの営業マンばかり。しかも、意外に体育会系が多い。西永さんも学生時代、陸上部で400mの選手だった。オリンピック出場を夢見て日体大に入学してきたが、当時、陸上部は短距離男子だけで120人もの部員数を擁す時代、トップアスリートが多く、アジア大会などの大会には出場できず、その夢は挫折した。しかし、大試合に出られなくても4年間走り続けた。それは思い出したくもない苦行に近いものだったが、「それでも走ることが一番自己表現ができ、自分が輝ける場だったから」と語る。そしてまた、「結果が出ないなかで、毎日、ただ少しでも早くなるためだけに、繰り返しトレーニングをしたことは、結果が出ないときでも踏ん張れる経験値としてすごく役立ってます」ともいう。

過去の実績をなげうってまで新しい世界に身を投じることができた熱き想い。それは、「フィールドは違っても、再び自分が打ち込めるものを見つけることができたのは幸せだと思います」と語ってくれたように、自分の人生を賭すに足る、自分が輝ける場をライフプランナーの仕事に発見したからに違いない。だから最後に西永さんが語ってくれた「結果がどうあれ、4年間、何か一つのスポーツに打ち込んで自分と戦い、自分を鍛錬してほしい。何でも構わない。それが確固とした自信となれば、社会に行ってもそれは絶対繋がっていくと思います」という学生へのメッセージには確信が込められていた。

（10月10日プルデンシャル生命保険株式会社にて取材）

People

石塚 麻子さん

（旧姓飯田）
東京ガス健康保険組合
［1990年3月短大体育科卒業］

子育てをしながら働き続けたい女性にとって、サポートしてもらえる制度や職場環境が大切です。

企業に勤める女性の多くは、結婚し出産すると、働き続けたくても退職せざるを得ないのではないだろうか。企業でも子育てのサポート制度などが整備されてはきているものの、まだまだ女性が働き続けることは難しい。そんな状況の中で、子育てをしながら働き続けている女性がいる。2歳の男児のママ、石塚さんである。

石塚さんは、東京ガスに入社して10年目になり、現在は人事部健康福利室からの出向という形で同じ本社ビル内にある東京ガス健康保険組合で働いている。出向して3年目になるが、実は、2年前の98年9月から育児休暇で1年間休職し、復帰後も1年間は育児勤務制度で定時より2時間短い勤務時間で働いていて、この9月から通常勤務に戻ったばかりである。それを可能にしているのは、会社のサポート制度がしっかりしているだけでなく、職場内にもバックアップしてくれる気風があるからに違いない。

しかし、働きながら主婦・妻・母親の一人三役をこなすのは大変なことである。「子育ては体力的にはきついですね」と、さすがに本音をポロリと漏らしたが、「でも、保育園の送り迎えなど、主人が出来ることを分担し育児に協力してくれるので何とかやってます。それに、最近は子供とも会話が成立するようになり、成長が感じられ嬉しいですね。毎日が面白いですよ」と、その時は笑みを浮かべながら母親の表情で語ってくれた。

ところで、ここでの石塚さんの仕事内容は、社員の診断書の仕分けや診断データの作成、医療費給付の円滑化を図る仕事であるが、入社当時は、「体育短大卒の社員で構成した“健康づくりチーム”で社員の健康プログラムを作成していました」というから、文字どおり日体大で学んだことが活かせるうってつけの職場といえる。就職活動でこの会社を知ったのは、東京ガスでも活躍していたアメリカンフットボール部OBの紹介だという。「アメリカンフットボール部のマネージャーとして忙しく、さまざまな企業を訪問する時間がなかったのです」。そのため、福利厚生が完備していて、学んだ知識を活かせる職場として東京ガス一本に絞り込んで就職活動をしたという。裏方として東奔西走、アメフト一色の学生時代だったに違いない。

だから、石塚さんにとって学生時代の思い出といえば、両親が帰宅時間を心配するほど、夜遅くまで入れ込んだアメリカンフットボール漬けの2年間。「大事な関西遠征の際に朝寝坊してしまったんですが、その時の焦った気持ちは一生忘れられません。結局、反省の意味で、坊主頭にはできないのでショートカットにしました」いうことが一番の思い出だという。

子育てに追われている石塚さんだが、「社会人というと仕事に追われて、時間がないと思われがちですが、工夫次第で時間は作れます」というように、社会人になってからさらに一層輝いているように見える。実際、入社後、会社のスキー部に入って一級資格を取得し、今はダイビングにも凝るなど、元気ハツラツ行動的である。そんな石塚さんがメッセージとして「充実した時間、生活を送るためにも、学生時代こそ社会の事柄に対して“なぜだろう?”という問題意識を常に持つと共に、生活に無駄な時間が無いようにして欲しい」と、アクティブな精神をもつことの大事さを最後に語ってくれた。

（10月11日東京ガス健康保険組合にて取材）

大学・短大ニュース

■『平成12年度 大学・短大説明会』

7月29日横浜・健志台キャンパス、9月9日東京・世田谷キャンパスにて高校生・保護者、高校教諭を対象とした『平成12年度大学・短大説明会』が開催されました。

参加者数は健志台が275名、世田谷が356名となり、全体では昨年のほぼ2倍でした。

塔尾学長の挨拶の後、学部・学科の紹介、入試概要、学生生活の紹介、就職状況と具体的な全体説明が1時間半に渡り前半のプログラムとして行われました。後半は、自由参加で在学生によるキャンパスツアーや、カリキュラム・入試・学生生活・就職に関する個別相談を開き、関係の教職員が個人それぞれの質問・相談に答えました。

このようないわゆるオープンキャンパスは、各大学で積極的に行われており、本学も今年で12回の開催を数え、参加者からいただいたアンケートなどを参考に、資料やプログラムの充実を図っており、開かれた大学として今後益々活発化させたいと思います。

■30周年で『紀要』記念特別号を刊行

本学『紀要』第30巻第1号が10月27日に刊行されました。続いて、次号にあたる第30巻第2号は2001年3月末日に刊行予定ですが、これは本学紀要を創刊して以来、ちょうど30周年に当たります。そこで今回は、『日本体育大学紀要第30巻記念特別号―特集：21世紀・体育スポーツ科学のこれまでとこれから―』と題して、依頼論文等も含めた記念特別号として発刊します。

■2000カリキュラムの実施

平成10年6月10日に「教育職員養成審議会」の第1次答申（平成9年7月）を基に、「教育職員免許状の一部を改正する法律」が公布されました。主な内容は次の通りです。

(1) ねらい

使命感、得意分野、個性を持ち、現場の課題に適切に対応できる、力量ある教員の養成。

(2) 教員養成カリキュラムの大幅な弾力化

大学が、教員養成に対する社会的要請を踏まえ、主体的にカリキュラム編成を工夫できるよう、教員養成カリキュラムに選択履修方式を導入するなど、弾力化。

(3) 教職に関する科目の格段の充実（細分化）

専門分野の学問的知識よりも、教え方や子どもとのふれあいを重視し、教員としての学校教育活動の遂行に直接資する「教職に関する科目」を充実し、教授方法としては体験や演習を重視。

この改正に伴い、本学でも教育職員免許状取得者の資質の保持と向上を図るため、免許状の授与を受けるために必要とする単位数を改めるとともに、各学科又は科のコースを見直し、資格取得に必要な科目の充実を含め、部分的なカリキュラムの変更でなく、全体的なカリキュラムを編成しました。

「教職に関する科目」の充実化、細分化には、「教師論」、「教育カウンセリング」、「教育課程論」、「総合演習」、「事前事後の指導」等を開講し、教育職員免許状施行規則第66条の5文部省令で定める科目の単位には、「英語C（外国語コミュニケーション）」2単位、「情報機器の操作」2単位の2科目を開講しています。

また、専門科目の区分では、学部共通科目を減らし学科特性を出すような学科科目を増やしました。

■北京体育大学図書館と『相互協力に関する取扱要領』を調印

日本体育大学と北京体育大学の交流・発展に寄与することを目的とする『学術・スポーツ交流に関する覚書』に基づいて、北京体育大学図書館長を招聘して、10月19日（木）に、本学図書館において、両大学図書館間の「相互協力に関する取扱要領」の調印式を実施しました。

右から刘北京体育大学図書館長、塔尾学長、谷釜図書館長

■2000カリキュラムで取得できる資格

＜大学＞	取得可能学科
●中学校教諭一種免許状（保健体育）	体育、健康、武道、社会体育
●高等学校教諭一種免許状（保健体育）	体育、健康、武道、社会体育
●養護教諭一種免許状	健康（養護コースのみ）
●健康運動実践指導者※	体育、健康、武道、社会体育
●日本体育協会公認スポーツ指導者※	
・地域スポーツ指導者（C・B級スポーツ指導員）及びスポーツプログラマー1種	体育、健康、武道、社会体育
・競技力向上指導員（C・B級コーチ）	体育、健康、武道、社会体育
・商業スポーツ施設における指導員（C級教師）及びスポーツプログラマー2種	体育（スポーツマネジメントコースのみ）
●アスレティックトレーナー※	体育（スポーツ科学コースのみ）
●第1種衛生管理者	健康
●社会福祉士※	健康（社会福祉コースのみ）
●学校図書館司書教諭	武道（伝統芸能コースのみ）
●レクリエーション・コーディネーター※	社会体育
●レクリエーション・インストラクター	社会体育
●障害者スポーツ指導員（初級・中級）	社会体育
●社会教育主事※	社会体育
＜短大＞	取得可能科
●中学校教諭二種免許状（保健体育）	体育
●幼稚園教諭二種免許状	保育
●健康運動実践指導者※	体育（生涯スポーツコースのみ）
●日本体育協会公認スポーツ指導者※	
・地域スポーツ指導者（C・B級スポーツ指導員）及びスポーツプログラマー1種	体育
・競技力向上指導員（C・B級コーチ）	体育

※は講習免除及び受験資格を得ることができる資格

■新採用教員紹介

資格	氏名	所属学科・科	所属研究室等	最終学歴	取得学位
＜学部＞					
教授	中野重人	武道学科	教職教育1	広島大学大学院教育学研究科	修士（教育学）
講師	本間啓二	体育学科	教職教育3	日本体育大学体育学部体育学科	
講師	町田輝雄	体育学科	外国語	早稲田大学大学院文学研究科	修士（文学）
講師	林 忠男	体育学科	情報処理	東京大学大学院総合文化研究科	修士（学術）
講師	佐藤 健	体育学科	情報処理	早稲田大学大学院人間科学研究科	博士（工学） 修士（人間科学）
＜短大＞					
助教授	川口祐二	体育科	専門1（教職教育）	立教大学大学院文学研究科	修士（教育学）
講師	眞如紀子	体育科	専門1（教職教育）	日本体育大学女子短期大学体育科	

■博士号取得教員紹介

資格	氏名	取得日	取得学位	取得大学名
教授	上野純子	平成11年3月26日	博士（医学）	北里大学
助教授	高橋一衛	平成12年1月27日	博士（医学）	昭和大学

■学会等表彰教員紹介

資格	氏名	受賞日	賞の名称	表彰団体等	研究テーマ等
教授	長船哲齊	平成12年5月18日	学会賞（瀬藤賞）	日本電子顕微鏡学会	「免疫電顕法とコンピューター・グラフィックスによる光合成蛋白質分子の局在と輸送経路に関する研究」
教授	松田治廣	平成12年6月2日	国際体操殿堂入り	国際体操連盟	
教授	中嶋寛之	平成12年6月27日	第3回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞	日本体育協会	「国体選手の医・科学サポートに関する研究班」班長として
教授	中野昭一	平成12年7月27日	学術功労賞	日本運動生理学会	

文部省が発表した「スポーツ振興基本計画」の解説

20世紀最後の五輪、シドニー大会。日本は、24競技に総勢438名からなる選手団を派遣し、金5つを含む18個のメダルを獲得した。その五輪メダルの倍増計画が、文部省から発表された。日本初のスポーツ施策といわれる「スポーツ振興基本計画」だ。競技力の向上だけでなく生涯スポーツの推進などの政策も盛り込まれ、特に日体大と関連の深い学校体育との連携が施策されている。

■基本計画の基本的な内容

基本計画は、「生涯スポーツ社会の実現」「国際競技力の向上」「スポーツと学校体育との連携」の3つの柱からなる（「計画の概要と目標」参照）。

「生涯スポーツ社会の実現」では、「誰でも気軽に各自の興味・関心、年齢、体力に応じて継続的にスポーツに親しむことができる」生涯スポーツ社会の実現を図るとしている。そのため、できるかぎり早期に、成人の週一回以上のスポーツ実施率が五十%になることを目指し、国民が日常的にスポーツを行うことができる「総合型地域スポーツクラブ」を、全国の各市町村に少なくとも一つは育成するとしている。

「国際競技力の向上」では、メダルの獲得率をアトランタ五輪の1.7%から倍増させることを政策目標に、トップレベルの競技者の育成・強化に向けた施策を総合的・計画的に推進するとしている。そのために、一貫指導システムの構築、ナショナルレベルの本格的なトレーニング拠点の整備、さらにスポーツ医・科学における成果を活用する、としている。

「スポーツと学校体育との連携」では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するために、学校体育の充実を図るとしている。さらに、部活動については、多様な児童生徒のニーズに応える環境を整備するために、地域社会におけるスポーツや競技力向上のための各種競技団体と連携を図っていくとしている。

■学校体育との連携が推進される社会的背景

学校体育との連携の推進が盛り込まれている背景には、従来の学校体育の部活がさまざまな問題を抱えて壁に突き当たっている、という現実がある。

そこには、少子化による生徒数の減少が影響している。全国高等学校体育連盟（高体連）のまとめによると、運動部所属者が七～八年で四十万人も減っており、一つの学校だけでは運動部が成り立たない状況が全国的に広がっている。そのため、十人制や七人制のラグビーが考案されたり、複数校による合同部活が進められているほどである。

また、教員採用が押さえられているため若い体育教員が少なく、部活の指導者がいないため廃部にする学校も多い。

さらに、子ども自身の運動部離れである。勝利至上主義や競技志向型の選手強化に邁進する運動部は、多様な形でスポーツを楽しみたいと思っている今の子どもたちの欲求とマッチしなくなってきている。

【計画の概要と目標】

【生涯スポーツ社会の実現に向けた地域のスポーツ環境の整備】

（成人の週1回のスポーツ実施率が2人に1人になることを目指す）

□総合型地域スポーツクラブの全国展開

□スポーツ指導者の養成、確保

□スポーツ施設の充実

【国際競技力の総合的な向上】

（五輪メダル獲得率＝日本の獲得数を総メダル数で割ったもの＝1996年アトランタ大会の1.7%から倍増させる）

□一貫指導システムの構築

□トレーニング拠点の整備

□競技者が安心して競技に専念できる環境の整備

【学校体育とスポーツとの連携】

（生涯スポーツ・競技スポーツとの相互理解を推進）

□運動に親しむ資質や体力を培う学校体育の充実

□学校体育指導者や施設の充実

□運動部活動の改善と充実

News Eye

[上半期クラブの主要大会成績]

クラブ名	大会名	結果	氏名	記録など
■アーチェリー部	全日本学生東日本大会	男子　1位	藤原真也	
	全日本学生東日本大会	女子　1位	仲肥由里子	
	全日本学生東日本大会	女子　2位	宮下友子	
	全日本学生男女王座決定戦	男子　2位		
	全日本学生男女王座決定戦	女子　優勝		2年連続17度目の優勝
■ウエイトリフティング部	東日本学生個人選手権	女子　53kg級　優勝	佐野美奈	
	東日本学生個人選手権	女子　58kg級　優勝	平良朝美	大会新
	東日本学生個人選手権	女子　63kg級　優勝	原口公子	大会新
	東日本学生個人選手権	女子　69kg級　優勝	大塚望美	
	東日本学生個人選手権	女子　75kg級　優勝	下玉利瞳	
	東日本学生個人選手権	女子　75kg超級　優勝	佐々木生子	
	全日本選手権	女子　48kg級　2位	松宮紅美恵	
	全日本選手権	女子　53kg級　2位	大竹 櫻	
	全日本選手権	女子　58kg級　2位	平良朝美	
■ゴルフ部	関東大学男子対抗戦	男子団体　2位		
	関東学生選手権	女子個人　2位	真鍋早彩	
	日本アマチュア選手権	男子個人　2位	太田直己	
■少林寺拳法部	関東学生大会	男子3段以上の部　優勝	奥村太一・野呂和功	
	関東学生大会	男子2段の部　優勝	大塚康彦・安彦海明	
	関東学生大会	男子二人掛けの部　優勝	岡田明哲・福岡善基・田中由喜	
	関東学生大会	女子2段以上の部　優勝	大西由佳子・中川幸江	
	関東学生大会	女子初段の部　優勝	遠山由香・代々城房枝	
	関東学生大会	女子二人掛けの部　優勝	中村葉子・高橋亮子・飯野真由美	
	関東学生大会	団体演武の部　優勝		
■水泳部	飛び込み日本選手権	男子シンクロ板飛び込み　優勝	宮本幸太郎	初優勝
	飛び込み日本選手権	男子3m板飛び込み　優勝	宮本幸太郎	初優勝
	飛び込み日本選手権	女子1m板飛び込み　2位	西井亮子	
	飛び込み日本選手権	女子3m板飛び込み　優勝	樋口まゆみ	3年ぶり2度目の優勝
	飛び込み日本選手権	女子シンクロ板飛び込み　優勝	西井亮子・樋口まゆみ	初優勝
	飛び込み日本選手権	女子シンクロ高飛び込み　2位	樋口まゆみ・荒井伴子	
	ミッションビエホ国際大会	女子800m自由形　2位	田島寧子	
■スケート部	スピードスケートサマークラシック国際	スプリント総合　優勝	山手新太郎	
■相撲部	全日本大学選抜七尾大会	個人戦　優勝		垣添 徹
	東日本学生相撲選手権大会	団体戦　優勝		初優勝・日大17連覇阻む
	アジア相撲選手権	個人戦・無差別級　優勝	垣添 徹	初優勝
	大学選抜相撲宇佐大会	個人戦　優勝	垣添 徹	初優勝
■ソフトテニス部	関東学生リーグ	男子　優勝		2季ぶり18度目の優勝
	関東学生リーグ	女子　2位		
	関東学生選手権	男子　2位	篠原和隆・村田裕臣	
	関東学生選手権	女子　優勝	坂下真知子・浜中 洋美	
	全日本大学対抗選手権	女子　優勝		2年連続9度目の優勝
	全日本学生選手権	男子シングルス　2位	丸 健太郎	
	全日本学生選手権	男子　2位		
	全日本大学選抜王座決定戦	男子　2位		
■ソフトボール部	全日本大学選手権	優勝		2年ぶり23度目の優勝
	東京都大学リーグ戦	女子　優勝		
■体操競技部	全日本学生選手権	男子種目別　跳馬　優勝	田原直哉	
	全日本学生選手権	男子種目別　平行棒　優勝	長田克彬	
	全日本学生選手権	女子種目別　段違い平行棒　優勝	川井亜希子	
	全日本学生選手権	女子種目別　跳馬　優勝	大須賀由美	
	全日本学生選手権	女子種目別　平均台　優勝	大須賀由美	
	全日本学生選手権	女子種目別　床運動　優勝	大須賀由美	
	全日本学生選手権	女子個人総合　優勝	大須賀由美	
	全日本学生選手権	女子団体　優勝	大須賀由美・町田千春・岡林由華・得能香織・川井亜希子・村田直美	10年連続36度目の優勝
	全日本学生選手権	男子団体　優勝	西村圭一・篠原啓介・中村周平・秋谷直樹・益岡尚純・水鳥寿思	3年連続25度目の優勝
	東日本学生選手権	男子団体総合　2位		
	東日本学生選手権	女子団体総合　優勝		
■軟式野球部	全日本大学選手権	男子　優勝		4年連続9度目の優勝
■ハンドボール部	関東大学リーグ戦	男子　優勝		9季ぶり34度目の優勝
■バスケットボール部	関東大学選手権	男子　2位		
■バドミントン部	日本ランキングサーキット	男子シングルス　優勝	大東忠司	
	日本ランキングサーキット	男子シングルス　2位	舛田圭太	
	関東大学リーグ戦	男子　優勝		3季ぶり20度目の優勝
■ボート部	全日本ボート軽量級選手権	男子シングルスカル　優勝	矢野彰男	
	全日本ボート軽量級選手権	女子かじ付きクオドルプル　優勝	工藤加奈子・野間口美紀・佐藤果純・国松奈々子・木下理美	
	全日本選手権	男子かじなしクオドルプル　優勝	矢野彰男・山本和也・井上祐市・柳橋孝志	
	全日本選手権	女子かじなしペア　優勝	工藤加奈子・野間口美紀	
■陸上競技部	関東学生個人選手権	女子七種競技　優勝	羽田久美子	
	関東学生対校選手権	男子十種競技　優勝	平田卓朗	
■レスリング部	全日本選抜選手権	グレコローマン63kg級　優勝	伊是名 正旭	

※上記のクラブ活動成績は、「Weekly News」のNo.1（5月12日発行）～No.12（8月23日発行）より抜粋したものです。
「Weekly News」は、学長室が週1回、教育・スポーツ情報をとりまとめ、教職員向けに提供している情報紙です。

MY VOICE

みんなの広場

このコーナーは、学生・教職員・父母・卒業生などあらゆる方々にキャンパス内、スポーツ競技大会の観客席、オープンキャンパスなど様々な場面での、「日体大に関する感想・意見」を取材や投稿により紹介するページです。"みんなの広場"へ自由な声をお寄せください。

●喫煙マナー

（健康学科3年、女子、世田谷キャンパスにて）

喫煙コーナが設置され、かなりの学生がマナーを守っているし、学内放送でも注意を呼びかけています。でも、外階段など指定場所以外での喫煙、吸い殻の散乱等が逆に目につくようになりました。健志台の友達に向うの様子を聞くと、「健志台では、ちゃんと守られている」とのことでした。喫煙する人は、最低限のマナーとして是非守って欲しいと思います。

●学食メニュー

（体育学科4年、男子、世田谷キャンパスにて）

いつも学食を利用しているのですが、入学したころとメニューがそんなに変わっていない気がします。季節のメニューや、テストメニューとかどんどん出して、好評なものは定番として欲しいです。あと、もう少し安くなるとありがたいのですが……。

●学内掃除のおじさん・おばさん

（短大保育科1年、世田谷キャンパスにて）

いつも黙々と働いていらっしゃる姿に感動を覚えます。あのような姿を知りながらゴミをそのままにして立ち去る人の感覚って分かりません。いまさら言わなくても…"ゴミは必ずごみ箱へ"。ちょっとしたことでキャンパスがきれいにもなるし汚くもなるのです。みんなでちょっと手を伸ばそうよ。

●『短大体験学習』参加

（短大体育科1年、世田谷キャンパスにて）

夏休み前に参加した「体験学習」は最高でした。今年から行われた短大生だけの野外実習ということで1年生全員が4泊5日で、山口県の瀬戸内海にある、大島という島でキャンプ、ハイキング、地引き網など色々なプログラムが展開されました。

わたし自身東京で生まれ育ち、このような環境の中で4泊したのは初めてのことでした。プログラムはそれぞれ楽しかったり苦しかったりと、想像していたことと大きな違いはなかったのですが、大島の自然環境には心から感動しました。朝夕の海の穏やかさ、満天に輝く星の美しさ、テレビでしか見たことのないあいった映像が目の前に表れたときの感動は決して忘れられません。それと4月から知り合った仲間たちと心から通じ合えたことは、これからの学生生活に大きな充実感を与えてくれるはずです。

●『全日本大学軟式野球選手権』観戦

（4年男子部員の父親、神奈川県伊勢原市営球場にて）

息子を地方からこの日体大に出し、最後の全日本大会ということで初めて観戦に来ました。部員（男子）が80名もいるということで、多くの学生たちと一緒に声を張り上げ、久しぶりに熱いひとときを過ごしました。決勝戦は淑徳大学に8－2で快勝、見事な優勝というお土産をいただき本当に嬉しく思います。

4年前のひ弱な息子からたくましい男に成長したなという感覚を覚え、授業料や部費など学生生活に必要な経費は多くかかりましたが、多くの部員・友人に恵まれ日体大の環境が素晴らしいものであったことに感謝しています。今後もこれらの経験を生かし、大きな人間として成長してくれることを願っています。

●『平成12年度 第1回就職ガイダンス』参加

（企業人事担当者、世田谷キャンパスにて）

学部3年生及び短大1年生に対する就職ガイダンスということで参加し、採用試験に対する心構えを中心としたお話しをさせていただきました。

日体大生と接して先ず感じることは、素直な目をしているなということです。スポーツマンの目というと、いわゆる"獲物を捕らえる時の眼"つまりキツイ目を連想するのですが、それはあくまで戦っている時の目であり、日常においては何でも受け入れる本当に優しい目であり、すなわちそういった人間性を持っているのではないかと感じるのです。

実社会に出てからは、その"スポンジ"のような心で企業人として必要な多くのことを吸収し、様々な場面で日体大生の活躍を期待しています。

●『平成12年度 大学・短大説明会』参加

（東京都高校3年生、女子、健志台キャンパス）

大学受験という学年になり、志望校である日体大の説明会に母と一緒に参加しました。

まず驚いたのは、健志台キャンパスの大きさです。体育大学というものが実感でき、私もこのキャンパスで思いっきりスポーツを行いたいと思いますし、充実した大学生活をイメージすることができました。

説明会では、学科概要、入試・学生生活・就職説明と、分からなかったことが随分理解できたように思います。全体説明の後、個別相談にも参加し入試に関して私なりの不安を相談したのですが、それも解消でき、一生懸命頑張ろうと思います。ただ、在学生やクラブ関係の方と直接話をするチャンスがなく、ちょっと残念でした。

INFORMATION

dot. NITTAI

■平成13年度入試日程　お問い合せ先／入試広報室（03-5706-09）

募集区分	願書受付	試験日	合否（合格）発表日
＜学部＞			
推薦入試Ⅰ期	11/1～11/8	11/26	11/30
推薦入試Ⅱ期	12/11・12	12/17	12/19
一般入試	1/9～1/15	2/2・3　2/4・5	2/10
帰国子女特別選抜	11/1～11/8	11/26	11/30
研究生・科目等履修生・聴講生	3/5	3/13	3/15
編入学	1/15～1/19	2/1	2/10
＜大学院＞			
博士前期課程*	10/2～10/6*	10/21・22*	10/23*
博士後期課程	1/15～1/19	2/20・21	2/22
研究生	3/5	3/13	3/15
＜専攻科＞	3/5～3/8	3/13	3/15
＜短大＞			
推薦入試	11/1～11/8	11/26	11/30
一般入試	1/9～1/15	2/1	2/10
帰国子女特別選抜	11/1～11/8	11/26	11/30
科目等履修生・聴講生	3/5	3/13	3/15

＊本年度は日程終了

■教育職員免許状取得希望者への説明会等の日程

お問い合せ先／学事課（03-5706-0914）詳細は掲示を確認のこと。

1. 教育職員免許状大学一括申請手続に関する説明会
●対象：学部4年、専攻科、大学院、短大2年　●期日：平成12年11月27日～12月1日

2. 東京都公立学校教育実習受入校通知に関する説明会
●対象：学部3年、短大1年　●期日：平成12年12月中旬実施予定

3. 13年度教育実習事前・事後指導に関する説明会
●対象：学部3年、短大1年　●期日：平成12年11月16日～22日 16:15～

4. 13年度教育実習事前指導講習会
●対象：1)学部3年　●期日：第1回 平成12年12月16日（土） 10:00～16:00
第2回 平成13年1月20日（土） 10:00～16:00
2)短大保育科1年　●期日：第1回 平成12年12月16日（土） 10:00～16:00
第2回 平成13年1月11日（木） 9:00～16:00

5. 平成12年度後期介護等体験事前指導講習会
●対象：体育学科、武道学科2年　●期日：第1回 平成13年2月17日（土）世田谷
平成13年2月24日（土）横浜
9:00～15:00
第2回 平成13年2月26日～3月2日
16:15～18:00
第3回 平成13年3月17日（土）世田谷
平成13年3月24日（土）横浜
9:00～13:00
第4回 平成13年3月17日（土）横浜
平成13年3月24日（土）世田谷
9:00～13:00

■『日本体育大学図書館所蔵　稀覯書目録』を改訂刊行

昭和62年（1987年）に、『日本体育大学図書館所蔵 特別図書目録』を刊行し、多くの専門機関、研究者、同窓、保護者、学生に配布して、日本体育大学の誇りとする一つの側面の広報に活用してきました。以来13年を経て、その後追加された貴重な稀覯書も相当数になることから、大学が所蔵する文化的遺産についての情報を広く提供するため、ここに内容を大幅に増補改訂し、平成12年11月初旬に刊行する予定です。

■学年暦（11月以降のもの）

月	日（曜日）	行　事
11	1（水）～3（金）	日体フェスティバル
	6（月）	休業日（フェスティバル代休）
12	22（金）	12月授業終了
	25（月）	冬季休業［1月8日（月）迄］
	25（月）～29（金）	大学　スキー指導実習　1団
		学外集中実技スキー（学外集中実技）
		短大　スキー実習
平成13年		
1	9（火）	1月授業開始
	29（月）	後学期授業終了（試験を含む）
	29（月）	短大　教育実習1［2月17日（土）迄］
2	1（木）～5（月）	平成13年度入学試験
	6（火）～16（金）	大学　スキー指導実習　2・3団
		学外集中実技スキー（学外集中実技）
		短大　スキー実習
	7（水）～20（火）	大学　スケート指導実習　1～3団
		学外集中実技スケート（学外集中実技）
		短大　スケート実習
	13（火）～26（月）	短大　スポーツ現場実習
3	1（木）～7（水）	ホームルーム期間（成績ガイダンス含む）
		次年度履修申告手続き期間
		就職オリエンテーション
	10（土）	卒業式（東京世田谷キャンパス）
	12（月）～	春季休業

TOPICS

平成12年度　日本体育大学　公開講座　メインテーマ「子どもの“からだと心”を考える」

平成12年11月5日（日）、本学、東京・世田谷キャンパスにおいて「平成12年度日本体育大学公開講座」が実施されました。
当日は晴天にも恵まれ、多数の参加者にお集まりいただきました。講演・体力測定においては実に熱心に受講・参加されていた姿が印象的であり、小学生実技においては、みんな元気いっぱい楽しんでいました。参加者からの評判も良く、来年もまた、実施して欲しい等々多くの声が寄せられました。今後も様々な企画で充実した公開講座としたいと思います。

講座名		講師名	講義・講座内容	受講対象者	参加者数
講　演		正木健雄（日本体育大学特任教授）	「今、こどものからだと心は?ーいきいきとした生活のためにー」	一　般	28名
小学生実技	器械運動	池田敬子（日本体育大学教授）	「みんなで楽しくからだを動かそう!!」	小学生	118名
	バスケットボール	西尾末広（日本体育大学教授）			
	サッカー	森田英夫（日本体育大学講師）			
体力測定		高橋一衛（日本体育大学助教授）	握力・背筋力体脂肪率・血圧・骨密度等11項目の体力測定を実施し、今後の健康・体力つくりに役立ててもらう。	一　般	52名

［編集後記］広報委員会組織による『情報誌』をあらたに発刊することが、正式決定された。何をどのように伝えようかと、アウトラインの策定に入った。タイトルは『NITTAIDAI』。特に今年はシドニーオリンピックが間近に迫っており、「日体大関係者の活躍を大きく伝えられる結果になったらいいね」と希望含みのミーティングでスタートし、学内外の公式情報など、掲載内容の“素材集め”にかかることになった。そして、シドニーの結果が、当初の希望的観測通り現実となってくれたのである。この事実は、なにには増してみんなの大きな結束力となり、編集スピードは一気に加速した。インタビュー取材や、原稿作成を進め、打ち合わせを重ねていった。そして、発刊!
今回の『NITTAIDAI』発刊に際し、短い準備期間にも関わらずご協力をいただいた多くの方々に、この誌面を借りて心からお礼申し上げます。多くの方々と共に歩む『NITTAIDAI』として編集してまいりますので、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

［NITTAIDAI（ニッタイダイ）創刊号］発行日●2000年11月20日　発行●日本体育大学／日本体育大学女子短期大学　広報委員会　TEL 03-5706-0919　FAX 03-5706-0949　制作協力●（株）図書出版